

## 上行結腸内分泌細胞癌の1例

たけ ばやし まさ たか きり はら よし まさ  
竹 林 正 孝 桐 原 義 昌

キーワード：内分泌細胞癌，結腸，大腸

### 要 旨

症例は80歳代の男性で、腹部膨満と腹痛を主訴に近医を受診。イレウスを疑われ当院紹介となった。大腸内視鏡検査，注腸造影検査で上行結腸の全周性狭窄を伴う大腸癌と診断された。CEAは193.3 ng/mlと上昇していた。手術では腫瘍は成人手拳大で周囲リンパ節の広範な転移を認め、腹膜播種も2か所に認められた。病理学的診断はpSE, P1, N3 (25/25), StageIVであった。免疫染色ではsynaptophysin, chromogranin A, NSE, CEAが陽性で内分泌細胞癌と診断された。術後一旦退院したが術後1か月で悪液質が進行し原癌死した。大腸内分泌細胞癌は全大腸癌の0.027~0.2%程度で極めてまれな疾患である。診断時にはすでにStageIVであるものが多く、予後は著しく不良である。外科治療のみでは予後の改善は難しく、効果的な集学的治療の確立が望まれる。

### はじめに

大腸内分泌細胞癌はまれな疾患で、早期から血行性転移やリンパ節転移を起こしやすく、極めて悪性度が高く予後も不良である。われわれは極めて予後不良であった上行結腸内分泌細胞癌の1例を経験したので報告する。

### 症 例

症例：80歳代，男性

主訴：腹痛

家族歴：特記すべきことなし

既往歴：4年前，膀胱癌で経尿道的膀胱切除術。  
20年前から高血圧で内服治療中。

現病歴：2005年9月下旬から高度の便秘になり、腹部膨満，腹痛が出現したため，近医を受診した。イレウスを疑われ，ただちに当院紹介となり，入院となった。

入院時現症：身長170 cm，体重50.2 kg，血圧157/85 mmHg，脈拍76/分，整。胸部理学的所見に異常なし。腹部は全体に膨隆し，圧痛を認めた。

入院時検査所見：Hb 12.7 g/dlと軽度の貧血を認め，生化学検査ではTP 5.6，ALB 3.5と軽度の低蛋白血症を認めた。腫瘍マーカーではCEA

Masataka TAKEBAYASHI et al.

島根県済生会江津総合病院外科

連絡先：〒695-8505 江津市江津町1016-37